



●特集：「韓国の都市デザイン」韓国都市環境デザイ  
ン視察会報告

巻頭言：韓国ツアーの報告 ..... 1

1. ソウル市における最近の都市デザイン動向 ..... 2

2. 清渓川（チヨンゲチョン）の再生 ..... 5

3. 韓国都市設計学会訪問記 ..... 7

4. ソウル市政開発研究院訪問記 ..... 9

5. 慶州の街並みと世界文化遺産視察 ..... 12

6. 韓国のパブリックアート ..... 14

7. 韓国社会事情と都市環境デザイン ..... 15

●事務局より ..... 18

発行者：都市環境デザイン会議 広報・出版委員会

## 「韓国の都市デザイン」韓国都市環境デザイン視察会報告

### 卷頭言

### 韓国ツアーの報告

曾根 幸一

SONE KOICHI

曾根幸一・環境設計研究所

今年は「韓国ツアーで私が団長」をと JUDI 国際委員会が決めてしまった。昨年、南條洋雄さんの案内でブラジルツアーに参加したのがきっかけになららしい。大学を退任して少し閑ができたのと、断る理由もないでお引き受けしたが、団長などという形式があるのかないのか定かではない。しかし聞くところではこのツアー一例年の企画で、これまで土田旭さんが団長役で活躍してきたそうである。「ソウルなら誰でも簡単に行けるからこの際慶州まで」と昔を思い出して言ったのは私だが、韓国に詳しい訳ではまるでない。その先ただ神輿にのればいいと思っていたがそうはいかない。西奔東走で活躍の幹事役、服部圭郎さんとは初対面から気が合ったがその後何度も打ち合わせ。東大の西村研に来ていた韓国の中学校で教鞭をとる李さんを紹介。エージェントも決められておりこのツアー団体の気質をよく知っている。その李さんによると、まずこの団体は研修先が決められていて勉強するとき以外はバラバラに行動する。したがって食事などはそれらしき場所を案内すれば後は各自勝手、予約の必要など全くない。お土産屋に案内でもしようものならバックマージンを疑われるからダメ。ただ、エージェントにとってありがたいのは、行程が厳しくても苦情が出ないこと、集合時間には全員必ず揃うことだそうだ。要するに好奇心が旺盛で貧乏旅行になれた人達なのである。日程は3泊4日、これも国際委員会が決めたものでもう一日延ばしてはどうかという意見も出たが、現役で仕事をしている人にウイークデーをさらに一日割くのはまずいというのである。で、韓国周遊をこの短時間でとなった。とりわけ仁川から全州を経

由して大邱に至る初日はすごかった。ビビンバだけであとはナイトツアー、宿に到着したのは23時50分。慶州は型どおりの観光になったが、古代空間？のランドスケープをある程度は体験できたのではなかろうか。ソウルに向かう経路で安東の北回村に立ち寄ったのは評判がよく、また来てもいいねという声もあった。ソウルは李さんの案内で南大門周辺、市役所前広場、清渓川と再開発、午後は保存集落をみせてもらったが、時間が限られていたためそこであえなく大半が帰国、加藤夫妻、菅さん、一之瀬さんと私が延泊組になった。当日の夕方は成均館大学校の慎さんにお世話になり「韓国都市設計協会」に、また30日には泊さんの案内で「ソウル市政都市開発局」にお邪魔した。実はこの合間をぬって韓国都市デザインの大先輩である康さん（60年代に丹下研究室所属）との懇談を楽しみにしていたが、その直前に入院され、われわれの帰国直後に逝去されてしまった。ご冥福をお祈りする次第である。なお、両機関との懇談の報告は加藤さん、菅さんにお願いしたが、韓国の都市デザインは市民社会の違いはあるものの、その活動や体制からしてうかうかしているとわが国を抜き去っていくのではあるまいかというのが私の感想である。

# ソウル市における最近の都市デザイン動向

李 政炯

中央大学建築学部教授

## 1. 背景：ソウルの現況と課題

ソウルは朝鮮王朝の首都として 600 年の歴史を持ち、歴史都市である。ソウルの都市は朝鮮王朝の没落と日本帝国の占領期という近代化過程を経て、多くの変更を経験しながら都市は変わって来た。特に、1945 年の開放以降、本格的に都市化が進み 1960 年代高度成長期にソウルの都市空間が急速に拡張された。これにより、ソウルの真ん中を横切る漢江(ハンガン)を中心として旧市街地(歴史都市)である江北の都市機能の多い部分が、江南へ移転することによって、旧市街地(江北)と新市街地(江南)の都市空間構造が形成された。

21 世紀に入ってソウルの都市空間は、新市街地の形成と共に歴史地区(江北)が衰退する典型的な都心衰退状態を克服すること

が時代的な課題として登場した。

2001 年市長に就任した李明博氏は江南北均衡発展を選挙公約として挙げ、清渓川(チョンゲチョン)復元を始め、多様な都市空間を改造する本格的なプロジェクトを推進することとした。この多様なプロジェクトは主に江北の旧市街地都心部を再生するための公共プロジェクトが大部分である。

本稿では 2000 年以降から現在まで、ソウルで進んでいる都市デザインの現況を中心に紹介する。

## 2. 都心活性化事業プロジェクト

現在、都市デザイン施策はソウル市(公共)が主導するプロジェクトを中心に、それに関する法制度的な装置を整備しながら進められている。すなわち、ソウルの都市デザインは 1) 公共主導プロジェクトを通じる都心活性化事業、2) 江北の既成市街地再生事業、3) 行政体系の改編及び関連法整備などに要約できる。ここでは今までに実現されたプロジェクト(公共事業)と共に現在進行している主要都市デザインプロジェクト、施策を中心にまとめる。

### 2.1 都心活性化事業プロジェクト

2005 年完成した「清渓川復元プロジェクト」は日本でも広く知られている都市再生(復元)プロジェクトである。これは従前の都市河川を覆っていた(蓋をしていた)道路と高架道路と使った所を都市河川へ復元した、国内外の関心を集めたプロジェクトである(図 1)。清渓川の復元は単純な河川復元の意味だけではなく、都心を貫通する河川復元を通して、都心部全体を再生するという野心ある計画であった。ソウルの旧市街地都心部を通る約 5km の清渓川周辺部は清渓川復元と共に現在都市再生事業が進んでおり、最も先導的な都市再生事業の一つが「セウン商街再開発プロジェクト」である(図 2)。セウン商街は都心部に零細商店店が密集した衰退地域で清渓川復元による再開発計画が進み、現在段階的な着工を控えている。この計画のメインはセウン商街再開発プロジェクトを通じ、都心の南北緑地軸(幅約 90m)を繋ぐグリーンネットワークを形成する長期的なマスタープランを提示していることである。

また、「市役所前緑地広場造成事業」(図 3)によって交通広場で使ったソウル市役所の前にある交通広場は市役所舎前の一一番象徴的な広場として生まれ変わり、現在進んでいるソウル市役所舎増築事業の竣工したあかつき



図 1 清渓川復元プロジェクト



図 2 セウン商街再開発プロジェクト

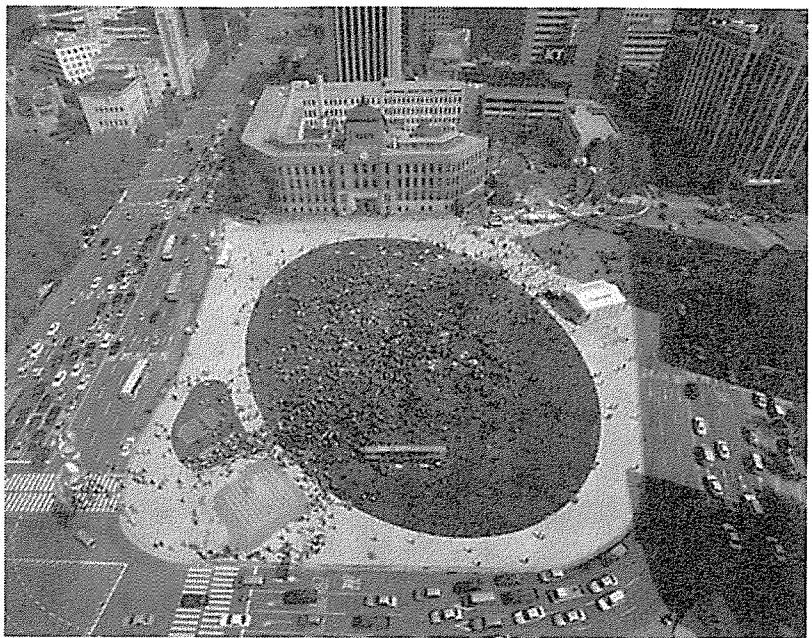


図3 市役所前緑地広場造成事業

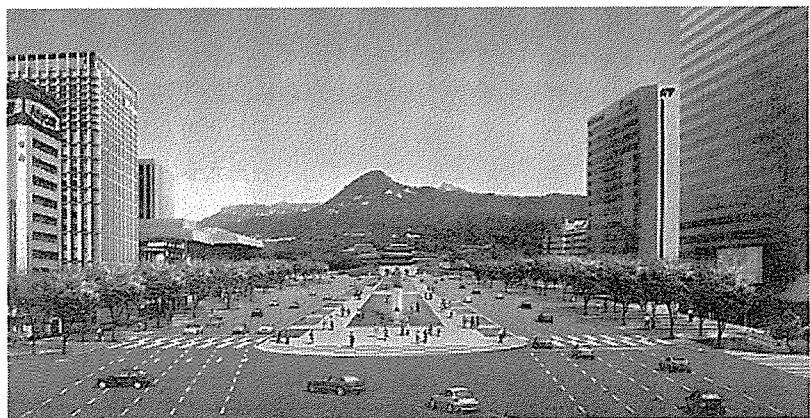


図4 世宗路象徴街路事業

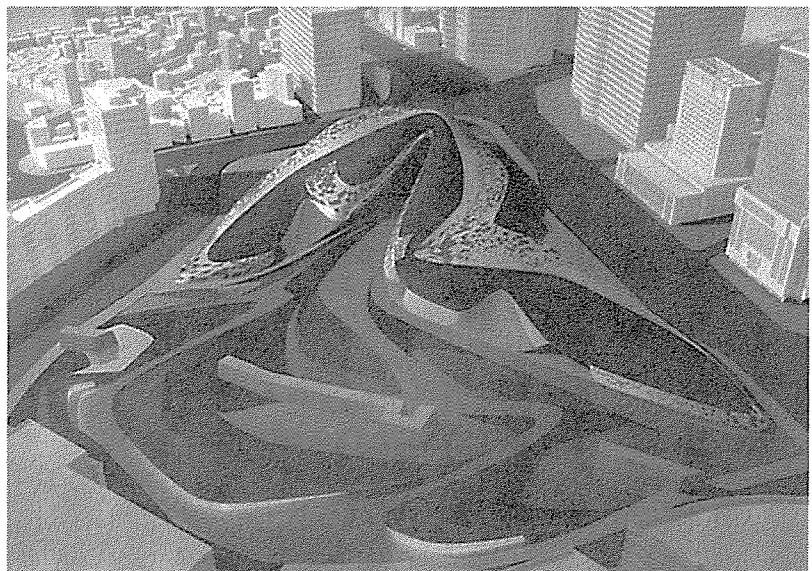


図5 東大門 運動場地区 ファションデザインセンター

には実相伴うソウル都心の中心広場として位置づけられるだろう。同時にこの市役所広場から昔朝鮮宮(景福宮/キョンボックン)を繋ぐソウル都心の象徴街路(世宗路/セジョンノ、幅90m道路)を現在の4車線を縮小し、中央に公園を造成する‘世宗路象徴街路事業’が現在進行している(図4)。

一方、旧市街地の東の方に位置している東大門(ドンデムン)運動場地区は最近衣類ファッションビルを密集させ衣類ファッションのメッカへと変貌している。そこに位置する東大門運動場(野球場、サッカー場)を移転し、その場所に公園と共に‘ファションデザインセンター’を建設するための事業が進行中で、先月国際コンペティションにより建築家ザハ・ハディッドの作品が選ばれた(図5)。

2007年新しく就任した現市長(吳世勳市長)は前市長の多様な都市再生施策を引き継ぎながら‘ソウル都心部4大軸再生マスターplan’を提案している。これはソウル都心部を東西方向を貫通する清渓川と共にソウル北側の北岳山と南側の南山を連ねた南北方向の4大軸を中心にソウル都心部における画期的な再開発を行うための長期的なマスタープランである。

そのほか、歴史都市ソウルの都心競争力の向上のため歴史的建物及び歴史地区の保全にも取り組んでいる。旧市街地の入口であった南大門(ナンデムン、国宝第1号)は、以前交通広場として使っていた場所を周辺交通体系の改変を行う‘南大門公園広場造成事業’を通じ市民が直接南大門にアクセスできるようにするだけではなく周辺に広い緑地空間を造成している(図6)。現在東大門周辺部も公園化事業が進行している。また、韓屋(ハノク)地区の保全、歴史文化地区の指定等を通じ歴史的な都市空間の保全を図っている



図6 市役所前緑地広場造成事業

## 2.2 江北既成市街地再生事業：ニュータウン事業

江北の既成市街地を再生するため、いわゆる‘ニュータウン事業’が進んでいる。これは従来の個別的、分散的住宅地再開発事業による基盤施設（道路、公園、学校等）確保不足を克服し、定期的、計画的に住宅地を整備し継ぐため大規模な住宅地区（ほぼ約20～30万坪）に対して整備マスター・プランを作成するようになった。マスター・プラン作成において計画推進費用、総括都市計画家（Master Planner/MP）選定、行政支援等（ソウル市/自治区）が決定した後、約1年の時間が掛かって整備を策定する。整備計画策定以降は事業単位別に民間主導の事業が進行し、基盤施設分担等に対し一部ソウル市の事業支援が施行される。2005年三つの模範地区を初めに、2006年12地区、2007年現在13地区がニュータウン地区と指定され事業が進んでいる。（図7参考）

既成市街地を対象に計画の初期段階にソウル市が任命した総括都市計画家グループ（一人の総括計画家と二人の支援計画家と構成）が参加しながら既成市街地の未来像をデザインしていく新しい都市デザイン方式に現在地方多くの地方自治体でも本格的な試みを控えている

## 2.3 行政体系改編及び関連法の整備

2007年就任した市長の主導でソウル市の公共デザイン向上を通じた都市競争力強化戦略の一環として市が主導する多様な公共事業プロジェクト（道路、公園、橋梁、街区造成、看板等が対象）と公共デザイン審議を義務付けている。都市デザイン委員会を設置し多様な公共デザインプロジェクトを審議し、更にソウル市が直接公共デザイン中心プロジェクトを実行している。市長の元公共デザイン戦略本部（本部長：副市長級）を設置し公共デザインプロジェクトを戦略的に実行したりすることや、最近ソウル市における集合住宅に関するデザインガイドラインを提示するなど多様な都市デザイン改善事業を主導している。現在ソウル市の都市デザインは‘都心競争力本部’（傘下に都心活性化班とニュータウン事業班が設置）と‘公共デザイン戦略本部’という二つの戦略本部を中心に多様な施策が展開している。また、韓国でも2007年‘景観法’が策定され都市景観について、より積極的な制度的なしくみを準備しており、ソウル市の場合は都市デザイン条例に基づき事業が進行している。さらに、2007年‘都市再整備特別促進法’が策定されより積極的な制度的な基盤が備えていくと見える。

## 3. 結論

現在ソウルの都市空間は非常にダイナミックに変化していて、‘デザイン都市’による都市競争力の強化が課題になっている。本稿では言及していないが現市長が‘漢江ルネサンスプロジェクト’としてソウルの最も魅力的な空間の一つである‘漢江’という水辺空間をテーマに多様な都市デザイン戦略事業が進行中で、発表を控えている。

このような都市デザインの働きは清渓川復元によって都市空間にドラマチックな変化が起こり、デザインされた都市の魅力を実感できることが何よりも大事で、これが都市デザインが市民の連帯感共感帶を形成するよい機会を提供することになった。今後、もう少し多様な形態の都市デザインプロジェクトの実践、景観法に基づいた生活空間デザイン、またこれを支援できる制度的な仕組み等が望まれる。



図7 往十里ニュータウン地区

## 清渓川（チョンゲチョン）の再生

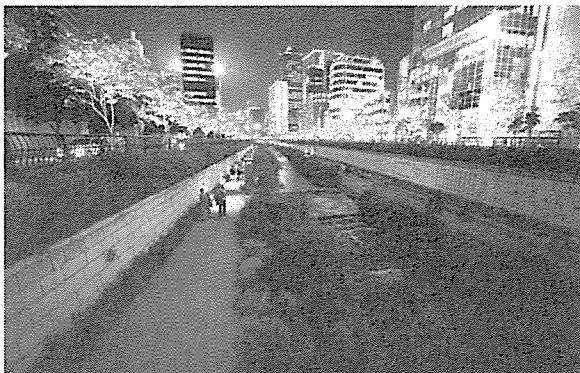
服部 圭郎

Hattori Keiro

代表幹事

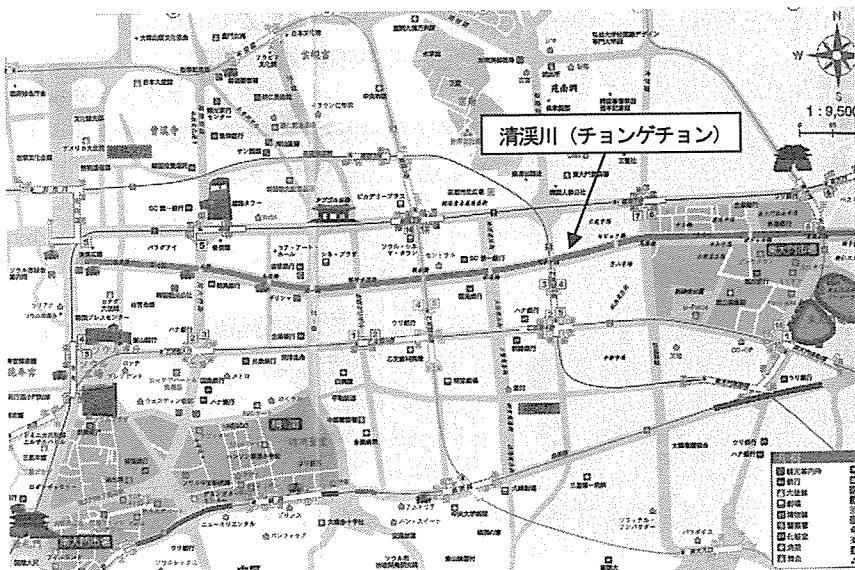
明治学院大学

ソウルの清渓川（チョンゲチョン）を訪れる。ソウル市内を東西に縦断するよう流れ、漢江に注ぎ込む総延長10.92kmの都市河川である。このチョンゲチョンは、頻繁に大氾濫を起こし、その治水事業は朝鮮王朝時代からの大きな課題であった。20世紀初頭には衛生問題などから、その暗渠化が検討され、1971年には遂にソウル市内からその姿を消してしまう。さらに、その上には高架道路を通され、ソウル市の空間から、そしてソウル市民の記憶から忘れ去られてしまった。しかし、2005年10月1日、その川の上を覆っていた高架道路が撤去され、暗渠化していた蓋が取られ、その姿を再び現したのである。イ・ミョンパク氏が2002年にソウル市長選に出馬した時の選挙公約として、このチョンゲチョンの復元を掲げた。総事業費は360億円。その事業費は、なんと市役所の職員の給料をカットしたことで捻出したと言う。従って、この事業を遂行するうえで市民の負担はゼロ。一方でその効果は絶大である。



チョンゲチョンの夜の賑わい

### チョンゲチョンの位置



まず、高架道路が撤廃されて、川が復元してから、ここを訪れた人は初年度で300万人。東京ディズニーランドの2倍弱である。ただの川の復元であるのに、なぜこれだけの人が集まつたのだろうか。まず、公共空間としてのデザインが相当優れている。特に夜のライトアップは美しく、デート・スポットとしては傑出しているだろう。実際、訪れた時も、京都の鴨川を上回るカップル密度の高さであった。あと、ロケーションがいい。ソウルの都心のど真ん中を横断している。東京でいえば、山手線内の神田川といった感じか。とりあえずチョンゲチョン川を訪問して、そこから明洞、景福宮、東大门、南大门、德寿宮、ソウル市役所と足を伸ばすことができる。そして、何より、この川はソウルという都市のランドマークとして人々を惹きつけた。それは完成すると同時に、ロンドンのハイド・パーク、ニューヨークのブルックリン橋、シドニーのオペラ・ハウス、パリのシャンゼリゼ、リオデジャネイロのコルコバードの丘、サンフランシスコの金門橋、バルセロナのサグラダ・ファミリアといった世界都市の優れたランドマークと肩を並べるような位置づけを獲得したのである。それにしても、人工河川がこのような優れたランドマークとなり得たソウルという都市は随分、幸せではないだろうか。

チョンゲチョンの周囲の地価は高騰しているそうだ。それはそうであろう。今までには高架道路という周辺地域からはアクセスが難しいが、騒音や排気ガスを撒き散らし、しかも日陰をつくり、景観的にも最悪な巨大な土木構造物があったのが撤去され、その代わりに水辺が緑で彩られた河川が現れたのだから。騒音の代わりに川のせせらぎ、排気ガスの代わりに水辺の植物がはきだす酸素、醜い土木構造物の代わりに詩情溢れる渓流の景観が現れたのであるから、土地の価値は高まるのは当然だ。さらに、このチョンゲチョンという東西の軸を面的にも展開させようとする都市再生計画が策定された。これは、昌徳宮と南山とを結ぶ南北の軸を幅100メートルの緑道として整備するもので、これが完成すると、ソウル市はそれまではスポット的に存在していた緑がネットワーク化されることになり、随分と自然溢れる都市になると考えられる。まさにアジアを代表する環境都市の誕生である。

とはいえ、ケチをつけようとするとつけ

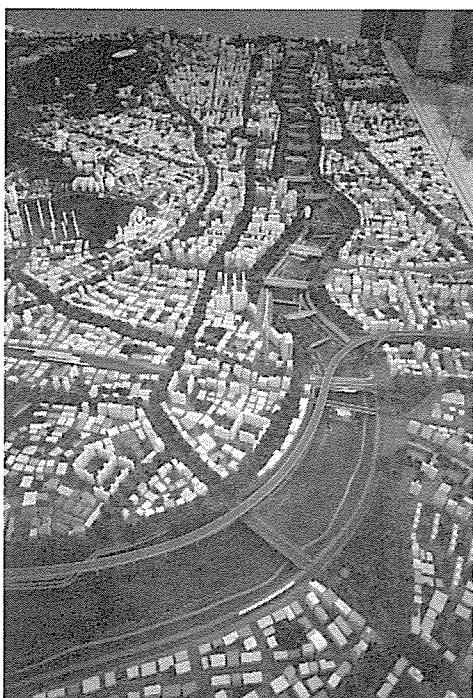
られない訳ではない。まず、チョンゲチョンと平行して走る道路は相当、渋滞していた。道路を取り壊して交通容量が減っているので、これはまあ予期できた問題である。個人的には、道路は渋滞しているくらいが適当な水準であると考えているので、まあそれほど問題ではないと思いたいが、地元のバス・ドライバーやタクシー・ドライバーにとっては辛いものがあるだろう。自動車ではなく、人間のための空間再生事業があるので、まあ我慢してもらうしかないだろうが、マイナスといえばマイナスではある。

加えて、ちょっと気になるのはチョンゲチョンと道路沿いの商店とが空間的に分断されてしまったことである。チョンゲチョン沿いを歩く人々は多い。しかし、これらの人々は商店への回遊客にはなりにくい。これは、川と上にある道路とのアクセス・ポイントが少ないからである。もう少し、チョンゲチョンにアクセスできる場所が多いと、その周辺への波及効果も大きくなるであろう。

さらに、このチョンゲチョンは流量が少ないという問題がある。そのため、チョンゲチョンを流れる水は50%が漢江、30%が地下鉄の地下水、20%がチョンゲチョンの上流から来ているそうである。漢江の水はチョンゲチョンの下流からくみ取っているので、循環させているとも思われるが、この点はエネルギーの無駄遣いかもしれないし、本質的ではないような印象を受ける。

しかし、このような問題点は、その功績に比べれば取るに足りない。チョンゲチョンの事業は、都心にアメニティ空間を創造したこと、観光スポットとして人々を集めしたこと、周辺の地価を上昇させたこと、など多くの成果を実現したが、チョンゲチョンの最大の功績は、ソウルの都市の埋もれてしまった記憶を蘇らせたことである。つまり、ソウル市のアイデンティティともなる分断されていた歴史の流れを再び呼び起こし、現代へと紡いだことである。このような時間の積み重ねという縦の軸をしっかりと発現させた都市というの非常に強い。チョンゲチョンの再生は、ソウルの都市の失われたアイデンティティを発露することに成功したのである。この功績こそがチョンゲチョンの事業において、最も重要で価値のあることであると筆者は考えるのである。しかも、それを200億円といつた大したことのない事業費でやり遂げてしまった。

ソウル市は「チョンゲチョン復元事業を成功に導いて、これが今後世界的な環境復元事業のベンチ・マーキングとして位置づけられるとともに、ソウルが世界的な競争力をを持つ都市として改めて生まれる、その出発点にしたいと考えている」と、同市でチョンゲチョン復元推進本部の李龍太工事担当官は述べている（李龍太「ソウルの夢と希望」、『ビオシティ』no.30, 2005）。そう、ソウルにとって、このチョンゲチョンはあくまでも都市再生のスタート地点なのである。それは経済成長に邁進し、ある程度の達成を得た後、新たな都市の将来への道のりを提示するためのメルクマールであるのだ。まさに、ジャイメ・レルネルがクリチバにおいて「花通り」の歩行者専用道路という一大事業で、市民の心をつかみ、その後の都市改造に成功したのと同様に、ソウル市は、このチョンゲチョンを契機として、ソウルの都市を飛躍させようとしている。チョンゲチョン広場に「スプリング」と呼ばれる巻き貝のお化けのようなオブジェがある。これは、チョンゲチョンの復元一周年を記念してつくられたものだが、これからソウルの跳躍を表現しているそうだ。ソウルは、都市デザインの力をスプリング・ボードとして将来へ跳躍しようとしているのだ。



チョンゲチョンミュージアムにある全体模型

## 韓国都市設計学会 訪問記

加藤 源

KATO GEN

日本都市総合研究所

韓国に JUDI に似かよった都市設計に係わる団体が組織されたという情報は、組織化前後に韓国の康炳基（カンビヨンキ）先生（昭和 33 年東大卒、丹下研究室及び丹下健三都市建築設計研究所を経て韓国に帰国、漢陽大学教授に就任、同退職後、空間情報計画研究所所長、初代韓国都市設計学会会長、今回の視察旅行中に発病、帰国後間もなく急逝）が来日される度に聞いていた。そして組織ができたら JUDI と積極的に交流しようと期待を持たれていた。

その後、訪韓のチャンスがなく、今回の韓国都市設計学会訪問は先生の期待を実現する第一歩であった。私達（曾根、菅、それに筆者）は、視察団全体のスケジュールに加えて一晩延泊することとし、5月 29 日の夜に都市設計学会を訪問したい旨を成均館大学の慎重進（ジョングジンシン）先生に伝え、調整の上、会長の安建嚇（アンギュンヒック）先生、国際交流委員長の Haeseong Je 先生に時間を取りて頂く約束をしていた。

慎先生に案内頂き、学会を訪問すると、安、Haeseong 両先生に大変に歓迎され、早速双方の組織紹介となった。両先生から説明を受けた韓国都市設計学会の概要は以下の通りで、JUDI とは異なる点も多々あった。

- ・ 設立：2000 年 3 月
- ・ 設立目的：21世紀の韓国における都市デザインの変革と新たな方向を見定め、以て都市空間と都市文化の改善に資するとともに、これに係わる専門家の質の向上を目指す。
- ・ 会員数：現在約 1,900 人
- ・ 会員構成：専門家、学生、都市デザインに関心のある市民
- ・ 主な活動：研修会、ワークショップ、アーバンデザイン会議の開催、実地見学等を通じて都市デザインに係わる研究、その実現を図り、現下の状況に対応する都市デザインの概念の構築。季刊アーバンデザイン・ジャーナルの発行



写真・1 韓国都市設計学会の活動について話を聞く

- ・ 学会運営：入会金 50,000 ウォン（約 7,000 円）、年会費 30,000 ウォン（約 4,500 円）
- ・ 学会運営の実態：会員全体の 20% が会費を納入、学生会員が多く滞納者が多い。それ以外に官公庁等からの委託研究を受託し、研究費の 2 割程度を研究の事務管理費として学会の収入としている。これにより、年間 3 億ウォン（約 4,200 万円）程度の収入。年間運営費の約 7 割に相当。
- ・ 事務局：韓国科学技術センタービル（ソウル市）内
- ・ 支部：Pusan (釜山)、Ulsan (蔚山)、Kyoungham (江陵)

JUDI と比較して、韓国都市設計学会は他の多くの学会と同列に位置づけられ、従って事務局も公的な建物の一隅に位置し、韓国の学術体制の中にある。ここが JUDI とは大きく異なる。わが国においては都市計画学会の研究対象が幅広く、都市デザインもその一部となっていることから独立した都市設計学会の設立は困難である。一方、わが国の都市計画学会も外部からの委託研究を受け、活動資金の一部にしている点は同様であるが、韓国の場合、大学教授らが公的機関から研究を委託されることが多く、個人では契約が出来ないため、学会に持ち込むケースが多いとのこと。このような事情以外に学会の幹部が学会運営の健全化のために、自らの研究を学会に持ち込んでいるとの話しもあつた。いずれにしても委託研究から得られる事務管理費の総額約 4,200 万円程度はわが国の都市計画学会における場合とほぼ同じ額ではないかと思われる。また JUDI は委託研究を受託しておらず、会費のみで運営されており、毎年の運営は極めて厳しい状況が続いている。

一方、会員総数 1,900 人の内、2 割程度が年会費を收めているということは実質会員は 400 人弱ということになり、JUDI の 500 人と比較して概ね同程度の活動実態であるのではないかと思われる。

また、支部は 3 都市に設置されているとのことであるが、釜山以外は小都市で、JUDI が ブロックごとの活動に重きを置いているのに対し、韓国都市設計学会の場合、日本の都市計画学会と同様に本部による活動が中心になっているものと思われる。支部における活動実態と本部との関係については聞きそびれた。次回の交流に際しての宿題にしたい。

当方からも JUDI について様々説明し、その中で両先生は JUDI が様々な分野のプロフ

エッショナルの集まりであること、ブロック活動を主体にしている点について関心を持たれていた。

こうして、一回目の交流であることから、双方の組織について紹介し合うことで時間が過ぎ、その後近くの韓国料理の店で韓国風しゃぶしゃぶを御馳走になった。この席には当初康先生も参加される予定であったが、前述の如く急に病を得られ、出席不可能になったことは極めて残念であった。しかしながら食事をしながらの会話も弾み、大変に有意義な交流となった。今後は双方協力して具体的に共同の活動を展開して行きたいと考えている。

なお、私達延泊組は翌朝、これも事前に約束してあったソウル開発研究院（Seoul Development Institute）に、都市計画・設計部の金(Sun-Wung Kim)部長を同研究院の朴(Jo n g-Hyun Park)研究員の案内で訪ね、ソウル市における都市計画、都市設計の取り組みと将来計画について話を聞かせてもらった。同研究院は市長直属の計画・設計機関で清渓川の復元、南大門周辺や市役所前の広場づくり等の計画、設計を進めた組織である。訪問後、朴研究員の案内で漢江左岸の漢南地区を見学したが、金部長の説明通り、漢南地区への様々な機能の集積が著しい勢いで進みつつあることが見て取れた。因みに韓国都市設計学会、ソウル開発研究院とも漢南地区に位置している。



写真・2 交流後の記念撮影（右から Haeseong Je 国際交流委員長、安建嚇会長、加藤、曾根、菅、二人おいて慎重進先生）

## ソウル市政開発研究院訪問記

菅 孝能

SUGE TAKAYOSHI

山手総合計画研究所

私達延泊組は翌朝事前に約束してあったソウル市政開発研究院（Seoul Development Institute）に、都市計画・設計部の金(Sun-Wung Kim)部長を同研究院の朴( Jong-Hyun Park)研究員の案内で訪ね、ソウル市における都市計画、都市設計の取り組みと将来計画について話を聞かせてもらった。

### Seoul Development Institute(SDI)とは

SDIは1992年にソウル首都圏政府（Seoul Metropolitan Government）によって設立された総合的包括的な都市政策研究策定機関である。SDIは都市計画、交通、環境、地域経済、自治体財政と自治体行政、社会福祉、文化、都市情報等広範な都市問題について調査研究し、ソウル首都圏の中長期開発計画や都市政策を策定してきた。

現在は、2006年に策定された「ソウル首都圏の第4次総合計画」の実行に関する調査研究、計画立案を行っている。

組織は最高審議機関であるBoard of Directorsのもとに6つの常設研究部門とそれらをサポートする2つの部門（計画調整事務室Office of Planning and Coordinationおよび総務管理事務室Administration Office）、ソウル首都圏の優先プロジェクトをサポートするために特別に編成された他分野横断的な6つの調査部門からなる。

6つの常設調査部門は、都市計画・設計部、都市交通部、都市環境部、都市経営部、社会開発部、電子情報・電腦都市部であり、6つの特別調査部門はソウル経済調査室、ソウル首都圏調査室、アジア極東都市調査室、文化調査室、ソウルエネルギー事情調査室、R&BDサポートセンターからなる。

SDIは総勢約260人、70人余の博士、と150人の大学院修士課程修了の資格を持つ研究員および40人の助手スタッフで構成されている。国内の大学・研究機関はもとより、アメリカを始めとする外国の大学研究機関とも協働の体制をとっている。日本で言えば、筑波の建築研究所とかつての都市整備公団の都市開発部が一体となつた組織のようなものという印象を受けた。日本では、民間プランナーが育っているので行政がインハウスで都市問題の調査研究や計画策定を行う事は少ないが、韓国では行政プランナーが必要に応じて大学等の研究機関とも協同しつつ、調査研究と計画策定を行って、都市計画を主導している様子が明確であった。設備の整った施設と職員の陣容に思わず、やはり科挙の伝統が今も息づいている、と感じたのである。

SDIはソウル都心の南、漢江の南に開けた新市街地漢南の南端の丘陵部に、ゆとりのある執務スペースと最新の設備機器を備えたモダンな建物を構えている。あえて、都心に位置するソウル市庁や韓国政府機関と離れた位置に立地しているのは、広大な新市街地漢南の都市計画・設計を主導するためもあったかと思うが、目前のさまざまな政治的要因に巻き込まれず中長期的な視点で都市政策や都市計画を冷静に研究策定する、という意図の現れと見るのは読み過ぎであろうか。

### 都市計画・設計部について

都市計画・設計部は15人のPh. D. の指導のもと、ソウルの自然、歴史、文化資源の調和による活力ある都市の創造を目指して生活環境と公共財の質の向上を図る事を目的に仕事をしている。それをより効果あるものにするために、部内に5人のPh. D. と20人のスタッフからなる都市設計チームとCAD工房を持っている。

SDIの都市計画・設計部の長である金氏(Sun-Wung Kim, Ph. D.) より「ソウルの21世紀都市再生(Urban Renaissance 21 of Seoul)」についてスライドによるレクチャーを受けた。

ソウルのマスタープランは2020年を目標年次とする計画で、「Heal」（急速な都市成長期の弊害の除去・回復）と「Restore」（自然、歴史、文化資源による環境再生）の二つをキーワードに成長管理政策による「Quality of Life」の実現を目指す計画となっている。

主なプロジェクトは、風水の伝統を踏まえた水緑ネットワーク計画、都心部歩行者空間整備計画、チョンゲ・チョン（清渓川）再生計画、歴史的環境保全と文化軸形成計画、Sang-Am電子産業都市計画などである。チョンゲ・チョン（清渓川）再生計画、南大門広場、市役所前のソウル広場、光化門大道などの都心部歩行者空間整備、北村の伝統的韓屋の街並保全再生事業、経済成長期の再開発ビル群を取り壊し清渓川と直交する北漢山・昌慶宮と南山を結ぶ南北緑軸計画など、都心部の実現したり進行中のプロジェクトについては現場を案内していただいた李教授の別稿レポートを参照してほしい。短い期間であったが、新しい計画理念を積極的に取り入れて都市再生に果敢に取り組んでいる情熱が熱く感じられる旅であった。

図-1. ソウル市空間構造マスター プラン

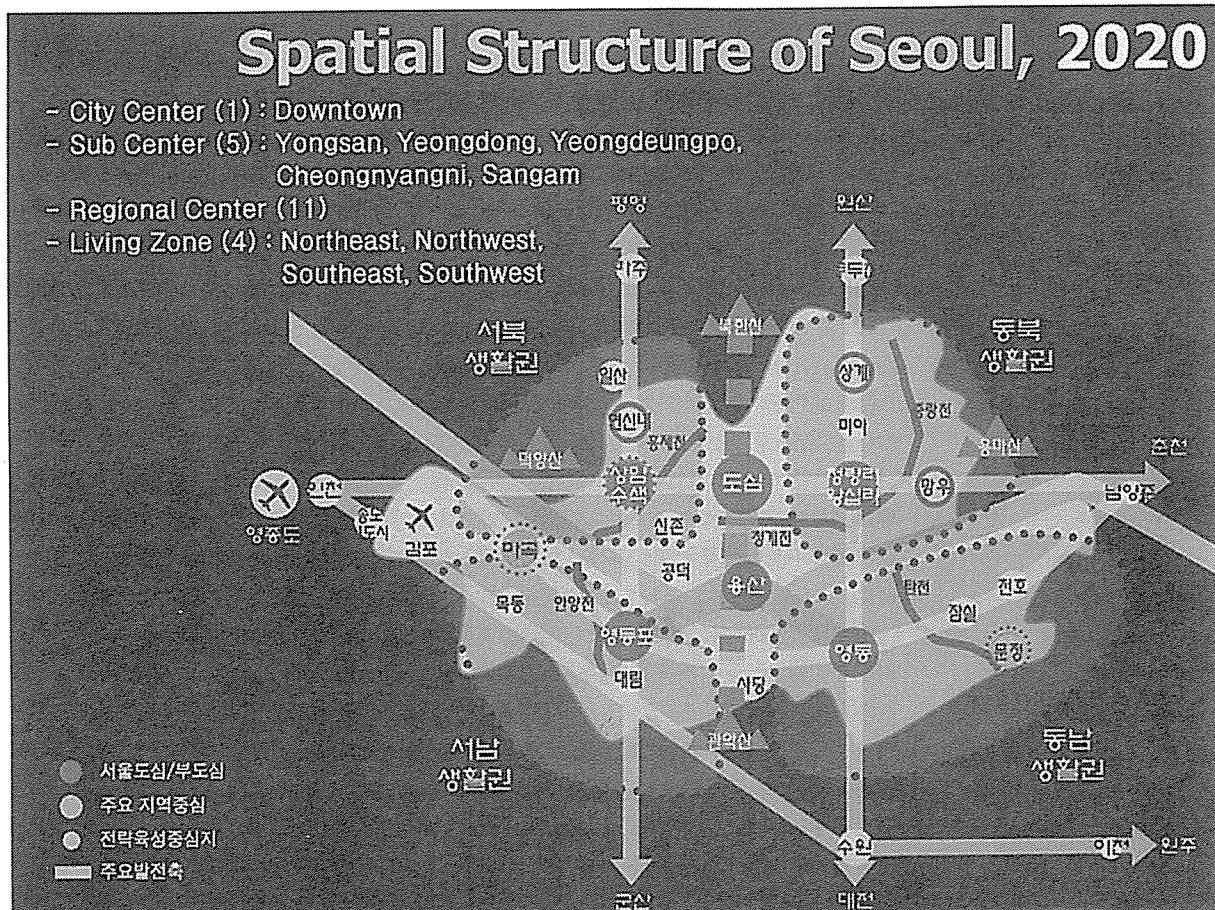


図-2. ソウル市都市再生マスター プランの主要プロジェクト分布図

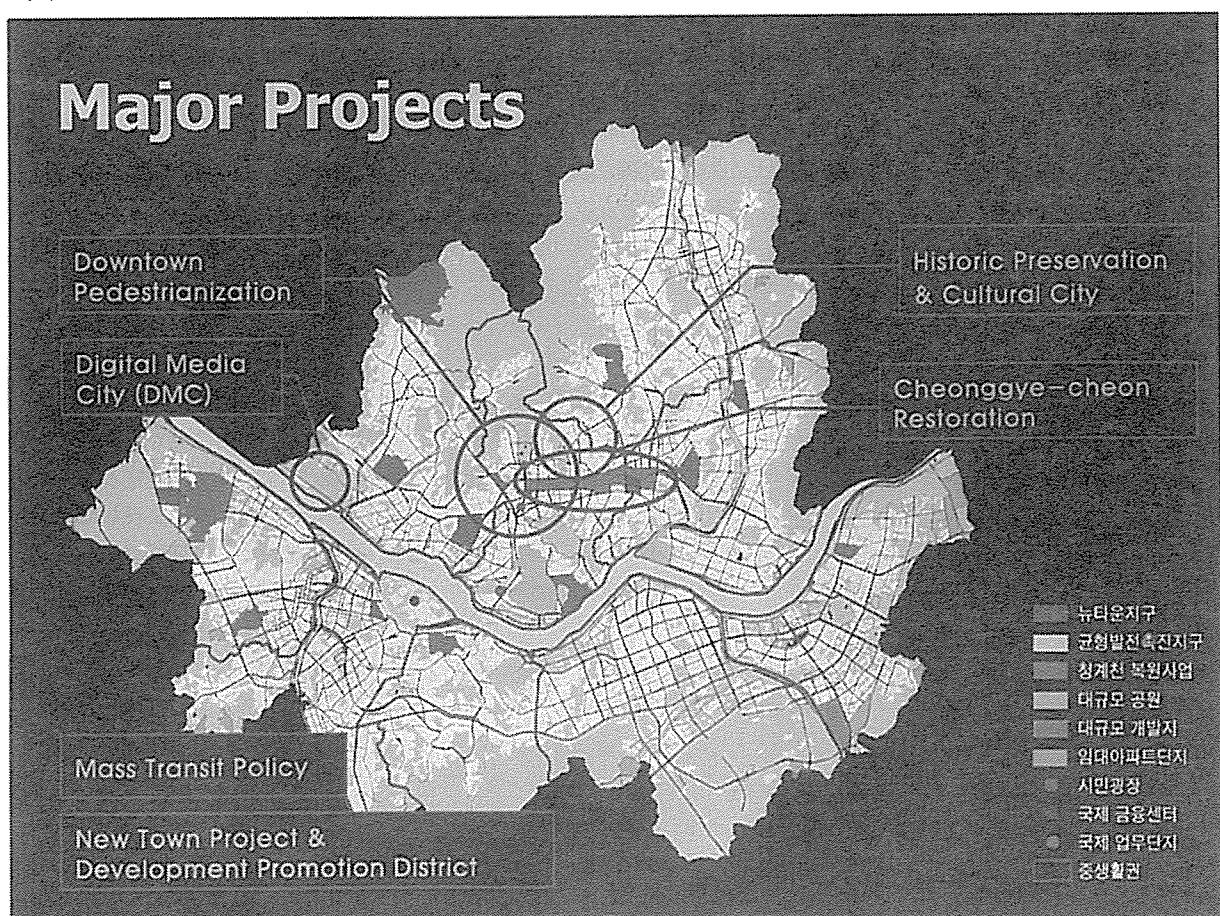


図-3. ソウル市水緑ネットワークプラン

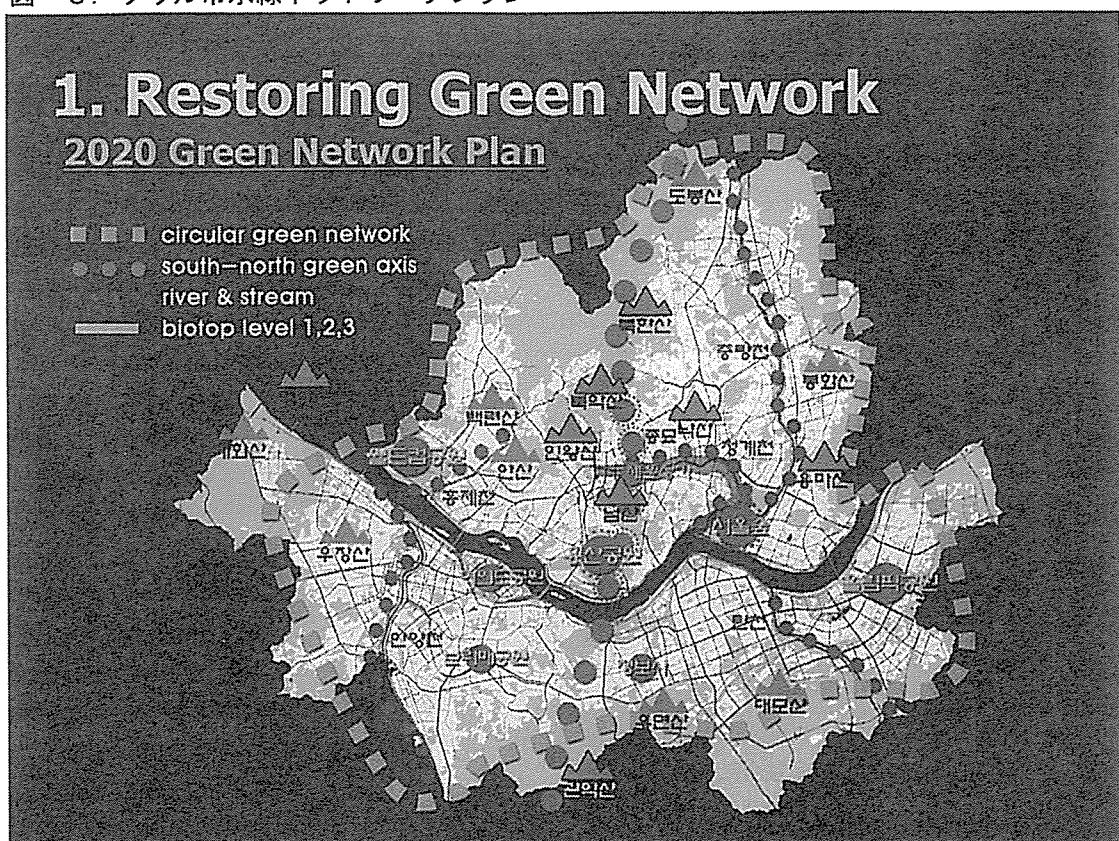
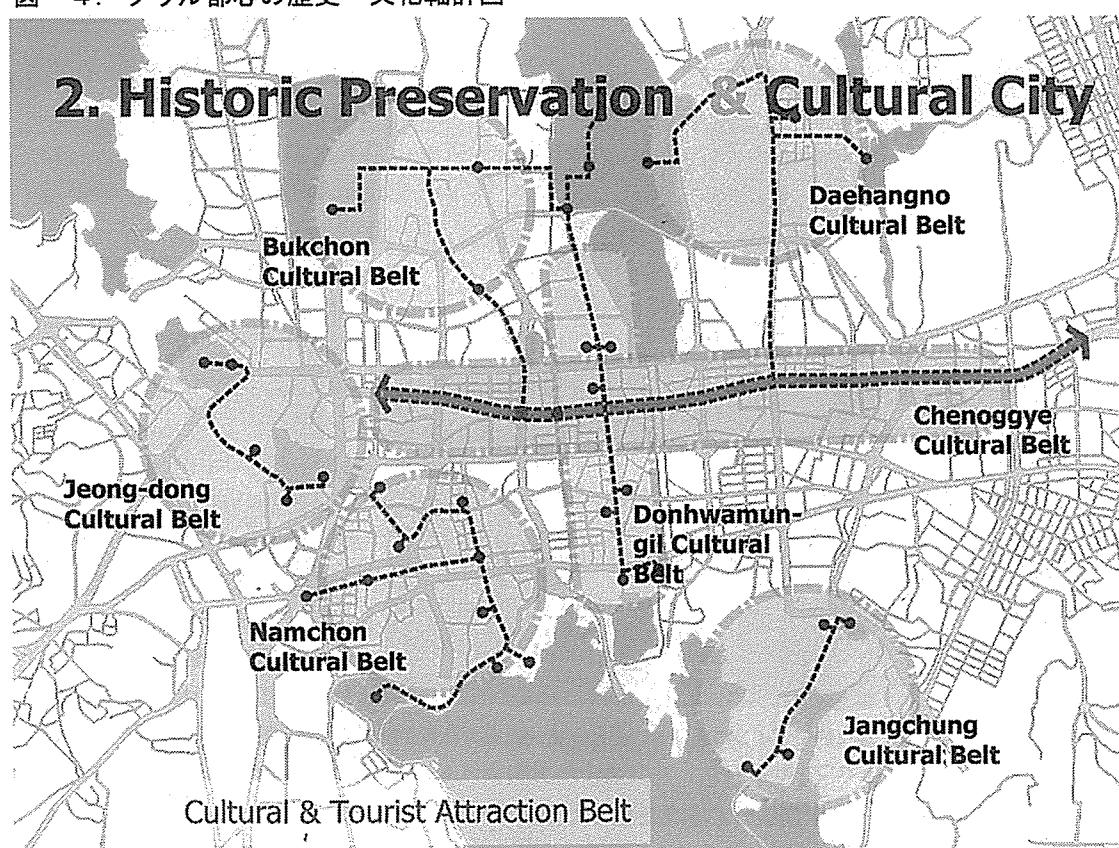


図-4. ソウル都心の歴史・文化軸計画



# 慶州の街並みと世界文化遺産視察

峰岸 久雄

MINEGISHI HISAO

(有)みどりとくらし研究所

## ■慶州の街並み

慶州は韓国を代表する歴史文化都市のひとつで、日本の奈良や京都と同じように韓国国内だけでなく世界各地からたくさんの観光客が訪れる古都である。

慶州は古墳の中に街があるといわれるくらい古墳が点在している。丸いオッパイ型の古墳が車窓からあちこちに見られる。その代表的な味雛(チュ)王陵と伝えられる古墳で、古墳公園として整備され 15 万坪の敷地に大小 23 基の古墳が保全・管理されている。

古墳公園の周辺地域の街並みを探索する時間しかなかったため、慶州全域についてとはいえないが、ここでは高層ビル等現代的な建造物がなく、当時のままの街並みが残っており、日本では見られなくなった路地等大変懐かしい感じの空間があちこちに見られる。暮らしが産み出したランドスケープである。

外壁や屋根等は新たに修復されているが、街並みとしての雰囲気は保たれており、居住者のコンセンサスは図られているようである。無秩序と思われる排水施設と不用意に置かれている生ごみ容器が、散策する観光客にとつては残念に見える。

古墳公園を訪れる観光客に対し、散策ルート等を整備・案内することで、保全されている街並みを観光資源としてもっと積極的に活用することができると思われる。



慶州の伝統な建物



現代的デザインの路地や外壁が歴史的街並みに多くみられつつある

## ■慶州の世界遺産と文化遺産

慶州市附近は、紀元前 1 世紀から 10 世紀に栄えた新羅王朝の都が置かれていたために、その時代に作られたと思われる古墳や仏教遺

跡が多く点在している。

それらの点在する史跡、古墳を保護・公開しているエリアが、屋根のない博物館として慶州歴史地域と呼ばれ、大半が慶州国立公園となっている。

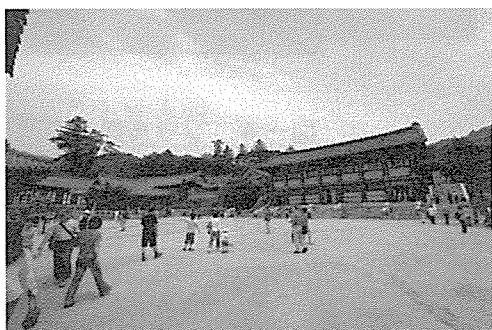
韓国の文化遺産は、周辺の自然環境も含めてほとんどが国立公園に指定されており、国立公園の入場料と文化施設の入場料を徴収し、管理費等に充当している。現在、日本でも国立公園の入山料徴収についての検討がされている。

今回の視察で訪ねたのは、韓国の国宝であり、ユネスコ世界文化遺産に指定されている慶尚南道の伽耶山国立公園にある海印寺、慶尚北道の慶州国立公園にある仏国寺及び石窟庵、古墳公園、瞻星台である。

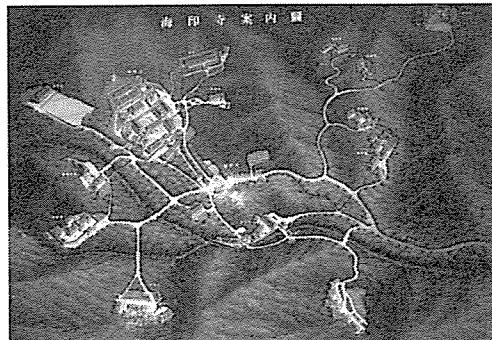
## ■海印寺と蔵経板殿

海印寺は新羅・哀莊王 3 年(802 年)に順應と理貞の二人の僧により創建された韓国三大寺院のひとつである。

海印寺には蒙古の侵略を防ぐ祈願のため、高麗 23 年(1236 年)から 16 年かけてホウノキの版木に刻んで作り上げられた仏教の經典 8 万枚の八万大蔵經が保管されている。それらは朝鮮初期の建築物、八万大蔵經殿に納められ保存されている。



海印寺



海印寺の全体配置図

## ■仏国寺と石窟庵

仏国寺は新羅・景德王の時代、宰相の金大城により 751 年頃に、現世の父母のために建立したといわれている。最盛期には 60 棟の木造建造物があったが、1593 年の文祿の役でほとんどが焼失、1659 年から再建が始まり 1973 年には無説殿、觀音殿が再建される。

仏国寺には現在、多宝塔、釈迦塔、蓮華橋、七宝橋、青雲橋、白雲橋、舍利塔等の建造物と金銅毘盧遮那仏坐像、金銅阿弥陀如来坐像等、国宝級の多くの文化財が残っている。

石窟庵は金大城が前世の父母のために、仏国寺を建てるときに一緒に建てた、花崗岩で出来ている人工石窟寺院で、円形の主室には釈迦如来坐像、が安置されている。



仏国寺の伽藍



石窟庵の外観

#### ■古墳公園と瞻星台

古墳公園は15万坪の敷地に23基の古墳があるが、目に見えない地下の古墳まで合わせると200基以上あるといわれている。その中で最も有名なのが天馬塚と皇南大塚である。

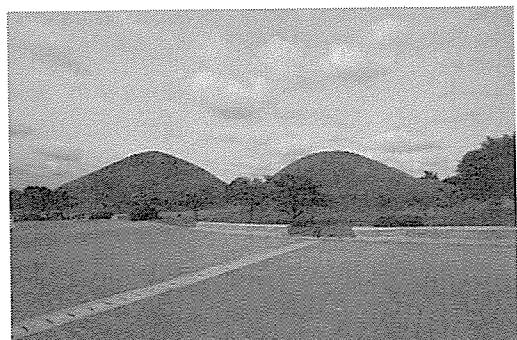
オッパイのような大小の古墳が織りなすように作り出す不思議なランドスケープは、とても心地よい感覚であった。

天馬塚は古墳公園の中で唯一内部が公開され、復元品であるが金製品の装身具等美しい出土品も展示されているため韓国の古墳時代を体感できる。

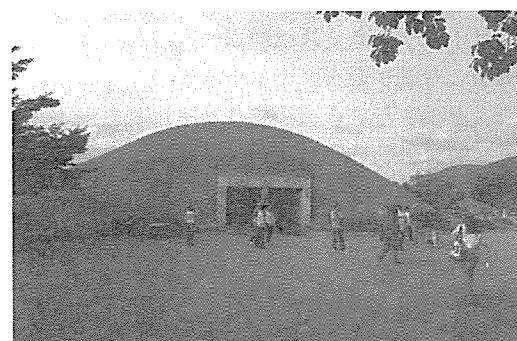
野生種か放したものか不明であるが、公園内にはいたるところでリスが見られ、公園に小動物が暮らしていることは、心が和む思いを感じさせてくれた。

瞻星台は、古墳公園に隣接している無料の公園にあるが、瞻星台を見るには入場料が必要である。634年に作られた東洋最古の天文台で、高さ8.7mの石の建造物、月数の12個の礎石の上に361.5(旧暦日数)個の花崗岩により積上げられている。途中に空けられた空間より星を観察したといわれている。公園の

モニュメントとして古墳と調和しているランドスケープとなっている。



古墳公園内の古墳群



天馬塚



天馬塚内のミュージアム



瞻星台の外観

## 韓国のパブリックアート

清水 敏男  
SHIMIZU TOSHIQ

学習院女子大学

韓国は1945年日本支配から脱して独立を回復し、新しい国づくりに向かったがその後の道は険しく、民主国家となったのは1988年のソウル・オリンピックの頃である。1980年にクーデターで権力を握り、光州事件を引き起こした全斗煥が民主化要求の国民運動によって退陣し、民主化宣言が出されたのが1987年6月で、その年の12月には大統領が初めて直接選挙で選ばれた。デモが收まり、世情が安定してきたのはわずか20年前のことすぎない。

現代美術が盛んだった。例えばパリで学んで帰国した画家パク・ソボーをはじめとするエコール・ド・ソウルと名乗るアーティストたちや、民衆芸術を標榜し政治運動と結びついた美術運動に身を投じたアーティストたちが盛んに活動を展開していた。

1990年に入ると海外に留学していた若いアーティストたちが戻り始め、韓国では現代美術が一挙に盛んになっていくのだが、その基盤は1980年代後半までの抑圧の時代に培われたものだったと言えるだろう。公共の場所にアートを設置するパブリックアートもまた軍政時代に始まっている。軍政時代は抑圧の時代であると同時に高度経済成長の時代でもあり財閥と中間富裕層が出現した。アートは彼らが支えていた。

軍政時代に始まったパブリックアートを振興する政策は、1972年の文化芸術振興法で、これは建設費の1%を美術や装飾に使うことを勧告する、というものだった。勧告であるので強制力はなかった。そうした状況において、ソウル・オリンピックは韓国のパブリックアートにとって重要な出来事となった。まず1984年にソウル

市がオリンピックをめざして建築条例で美術や装飾の設置を義務化し、他の自治体も追従した。そして1988年9月に開催されたソウル・オリンピックに際し野外彫刻公園がつくられ、世界各国の彫刻家たちによる優れた彫刻が多数設置されたことが大きな刺激となり、公共の場所に彫刻が設置されるようになったのである。

こうした傾向をさらに確固としたものにしたのは、1995年に公布された文化芸術振興法である。この法律によって民間の建築物において総建設費の1%を、ついで1997年からは0.7%をアートに使うことが義務づけられたのである。施主は建築に際し彫刻、壁画、絵画、書などを購入し、建物内部もしくは建物のそばに設置しなくてはいけないこととなった。こうして韓国のビルの周辺には多くのパブリックアートが登場し、街を歩けばかならずパブリックアートを目にするようになった。作品の出来映え、賛否など多くの問題点はあるが、アートが義務づけられていることが、街づくりについてまた文化振興について大きな影響を及ぼしている。とくに1997年の経済危機をアーティストたちが乗り切るために大きな支えとなった。

しかしシステムの不備が多く指摘され、例えば兵庫県立美術館名誉館長木村重信の1998年のレポートによれば、パブリックアートの審議会に「情実や不正がはびこり」(註1)、よって作品もおもしろくないものが多い、ということである。フランスでも公共建築の総工費の1パーセントをアートとデザインに使う、という法律があるが機能していない。1980年のミッテラン大統領時代には大規模なパリ改造とアート化政策が遂行されたが、それはこの1パーセント法によるのではなく、大統領直轄によって実現した。

2005年4月26日付けのネットニュースKorea.net(註2)によれば、同年5月12日にパブリックアートに関する法律の改訂を検討するための公聴会が開催される予定である、とのニュースが掲載されている。この件について公聴会はすでに2004年から始まっている。改訂の骨子は、政府が韓国パブリックアート振興委員会を設立し、各建設業者が個別に行ってている作品選択、購入を一括して行い、拠出金の率を上げ、さらに私有地だけではなく公園などの公共空間に作品を設置しようというものである。

これは民間業者には作品を選ぶ能力がなく、そのためにさまざまな問題が発生しているのであり、政府委員会が関与すれば不正もなくなり質も向上する、という発想である。しかし、現在まだ議論が終わらず、その法律は制定されていない。そのためにはあいかわらず不透明な方法



清渓川にあるクラウス・オルデンバーグの『Spring』

で作品が設置されている。例えば今回の韓国旅行で訪れたに、アメリカのアーティスト、クラウス・オルデンバーグによる彫刻『Spring』が設置されているが、この作品は賛否両論あるのは当たり前として、どのような経緯で設置されたのか判然としないということである。

このような問題を抱えているとはいっても、建設費からアートに関する経費を支出することを義務づけていることは重要なことであり、良いもの悪いものを含めて多くのアートが出現したことは市民の鑑賞力を育てる、という意味でマイナスにはならないだろう。かつて日本でも彫刻

公害ということが言わされたが、アートディレクター制の導入などによりやがて都市における彫刻の質は上がっていた。韓国もまた苦しみながらも新しい制度を確立し、清渓川を変貌させたようにパブリックアートを推進していくことが期待される。(協力: 中村衣里、ベ・ヨンジ)

註1) 木村重信、『パブリック・アートの現在』、宇部の彫刻

<http://www.city.ube.yamaguchi.jp/choukoku/text/ex19-01.htm>、1998年

註2) <http://www.kois.go.kr/>

## 特集 7

# 韓国の社会事情と 都市環境デザイン

作山 康

SAKUYAMA YASUSHI

代表幹事

都市環境研究所

10年前に観光で訪れたソウルとは空間も人の風景も大きく変わっていたのが印象的だった。空港や南山公園のソウルタワーなどからは、写真を撮ってはいけない時代だった(厳しくはなかったが)。李先生の話では、ソウル都心のシンボルロード(世宗路、幅90m道路、片側4車線)の中央を公園化すると聞く。以前は確かに緊急時に空軍が滑走路とするために分離帯もつけていないと聞いていたが、驚きである。

1998年の金大中政権の日本の大衆文化開放以降、2002年のサッカーワールドカップ共同開催をはじめ、両国の交流が市民レベルで起こるようになり、お隣り韓国との距離がぐっと縮まったのは皆さん承知通りである。韓流ブームなどもあり、私たちもいつの間にやら日頃の生活の中に、韓国語が聞こえてきても特別なものと感じなくなりつつある。韓国視察先でも、挨拶が自然にできるのは不思議なくらいである。こんな近くで遠い国といわれた韓国であるが、今回の視察で気づいた都市環境デザインとその背景について一部紹介したい。都市環境デザインは、そこに暮らす人々の生活や文化を映す鏡であり、生活や文化が都市環境デザインと密接に関係していると考えたからである。なお、情報ソースの多くは、添乗員の郭さん(日本の歴史文化を学んだ女性で、日本との比較文化論?を好んで話すソウル郊外に住む)からである。専門家集団の視察には、このような生活感があり博学の郭さんは、私たちにとってベストの先生であった。この場を借りて感謝したい。

まず韓国を概観してみよう。緯度をみると、ソウルでも新潟長岡市くらいで平均気温は東北地方に似ているが夏は若干暑い、韓国本土で静岡県から宮城県あたり、濟州島はほぼ高知県である。山地が多く最高峰の漢拏山(1950m)などの地形的影響と冬は北

西風と寒気団の影響からソウルでは1月の平均最低気温がマイナス6度であり、市民も氷点下は当たり前という生活である。この気候の影響もあり、ソウルのマンションは角地ではなく暖房効果のある周りに囲まれた階から売れていく。日本と逆の販売パターンである。このためか側面に窓がない住棟も多い。またバルコニーもインナータイプが多い。



テグ郊外で開発のマンション

また地震が少ない(南部で珍しく地震被害があつて、韓国の学生が成田から帰宅北区の防災センターの地震体験に修学旅行生見学にくる現象もある)地理的条件の中で、庶民向け高層マンション(アパートと呼ぶことが多い)の建設も地方都市まで広く展開しつつある。ソウルでは不動産バブルといわれるよう有名塾が集中した地域におけるマンションの高騰現象も起きている。韓国ではディベロッパーではなくゼネコンが住宅を建設するのが一般的である。ゼネコンが悪さを含めて高収益?をあげているようであり、橋が落ちる事件なども庶民からみると当然あり得ると認識しているようだ。多くのことで日本を見習う傾向があり、マンションデザインなどにも若干垣間見えるところもある。ネット情報でも韓国不動産業界における日本マンション研究レポートがみられる。但し地方郊外部のデザイン水準は、我が国も同様であるが高いとは

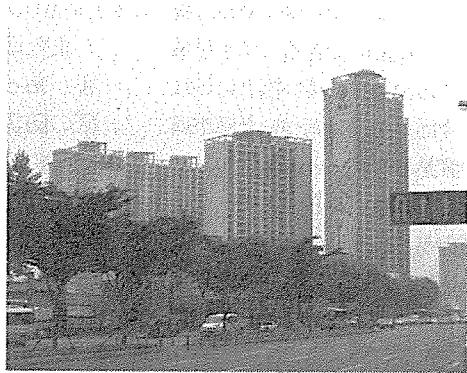
いえないモノが多い。国民の多くが戸建てではなくマンションに住みたいとニーズが不動産市場を支えており、大量供給のマンション建設が高速道路からいくつもみることができた。ちなみに、ソウルの景福宮東側にある歴史的街並み整備が進められている北村地区の伝統的民家は、裕福な人たちが住んでいることが多く、郭さんなどはマンションに住む方がはるかによいと言つたし、一般庶民では維持できないとも言つていた。なお、このように歴史的街並み整備は、ソウルでも各所にあるらしい。



ソウル北村地区の伝統的街並み整備



ソウル郊外のマンション開発



住棟側面に広告やデザインをするマンション（テグ）

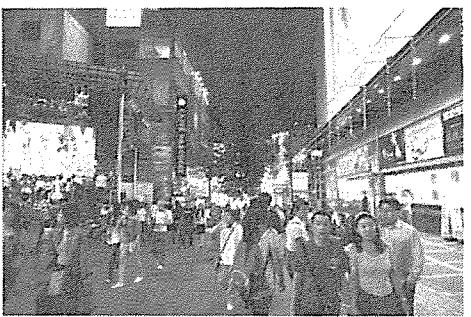
2006年の全人口は4880万人、韓国女性の出産率は1.1人で、台湾と共に世界最低値で、2050年半ばには4230万人まで減少する予測がある。子供が少ないので、教育熱心で教育のための夫婦別居生活も増えていると聞く。一方、若い世代は日本と同様でテレビゲームに熱を上げ、自殺率も高く我が国とあまり変わらない生活像が浮かんでくる。もちろん、都市部と

地方では言葉も方言以上に相当違うように、生活スタイルも違うようであるが、ソウルに限っては東京と大差ない印象を持った。

今回視察した都市は、最大都市ソウル特別市980万人（全人口の約2割）、ソウル都市圏（首都圏）でみると2250万人と国民の約半数近くが首都圏に集中している。大邱（テグ）広域市は250万人、全州市62万人、慶州（キヨンジュ）は28万人である。

平地の少ない韓国では、都市部への人口集中が著しく、さらに車の保有率も高くなりある。道路事情をみると、今回の視察で韓国をほぼ一周ぐるっと高速道路で回った今回の経験から、高速道路網としては十分整っている印象であったが、ソウル市だけは車の集中により常に渋滞し、高速道路には青色舗装のバス優先レーンも設けられているところもある。韓国のガソリン価格は、今年3月に1リットル189円だったが、5月には210円になった。アメリカは今年3月1リットル90円、日本は135円だった。韓国のガソリン価格は日本に比べて7割高なのだ。韓国では60%にあたる113円が税金なのであるにもかかわらず、車は増え続けている。我が国でも同様な傾向を示すのであろうか。ちなみに、新幹線（KTX）もソウルから釜山と木浦への2路線があり、ソウル-釜山は2時間でつながっている。

現在、韓国は不況真っ盛りであり、所得の二極化が進み、勝ち組負け組のどこかの国に似ている。輸出産業のみ好調だったが、かけりが見えている。ドル高ウォン安だが、円も安いので旅行者にあまり恩恵はない。不動産業が好調なゆえに、マンション建設の風景をみたり、若者が集まる明洞（ミョンドウ）みると、暗い雰囲気はみられない。まあ、日本も不景気でも同様であるが。



若者が集まる明洞の夜の賑わい

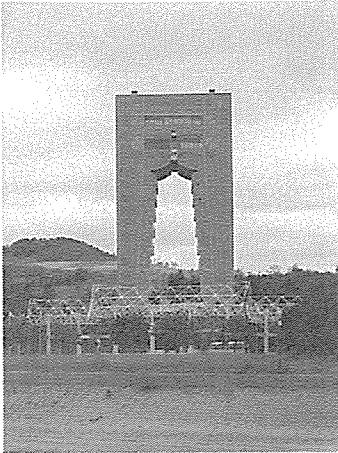
山地が多くが内戦が永く続いたことにより、緑が少ない山が各地にある。植林などを実施しているが、まだ小さな木が目立っていた。さらに、内線の影響は、世界遺産に登録されている資源にも垣間見られ、消失している資源も多い。また、どのような影響なのか日本における石工

のルーツであるものの、慶州の世界遺産における近年の石の補修やディテールは目を疑いたくなる仕上げも結構あった。

しかし、ソウルなど大都市部の建築や都市環境デザインを見る限り、日本と変わらない、いや一部では世界水準のものも少なくないし、ディテールなどもしっかりしている。大都市に技術や投資が集中されているためであろう。都市デザインプロジェクトなどは、はるかに日本より速い速度で動いているし、ダイナミックである。

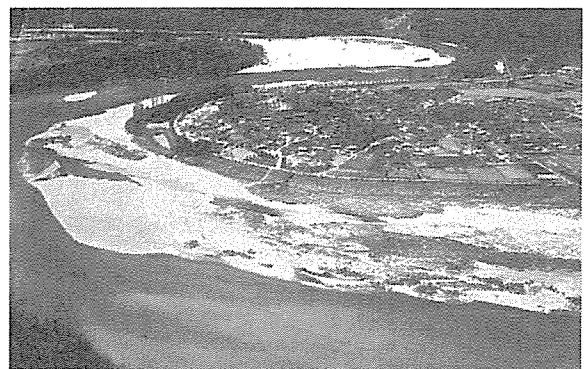
建築もかつてのナショナリズム的要因は少なくなり、旅行者の視点からはインターナショナルになったのはなぜか寂しい印象であったし、ソウルのスカイラインは、だいぶ悪くなった印象を受けた。逆に、スカイラインや歴史的な広域景観になじんでいるかは別として、慶州の世界文化博2007の建物がなぜかほつとさせられた。普通ならば、これは困ったデザインの事例として紹介するのであろうが、大阪万博のエクスポタワーとみれば、まんざらでもない。

最後に、当初予定になかったが、評判のよかつた安東（アンドン）の河回村（ハフェマウル）を少し紹介しておこう。ソウルの世界遺産を除けば、保全状態よりも存在の意味の方が大きいと思える他の韓国世界遺産であったが、世界遺産登録確実といわれている安東の河回村は、手放しで世界遺産と評価できる。まだ日本で情報少ないようであるので、現地の日本語パンフレット等から紹介する。

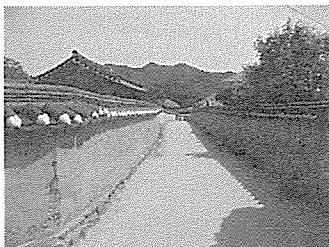


慶州の世界文化博2007のタワー

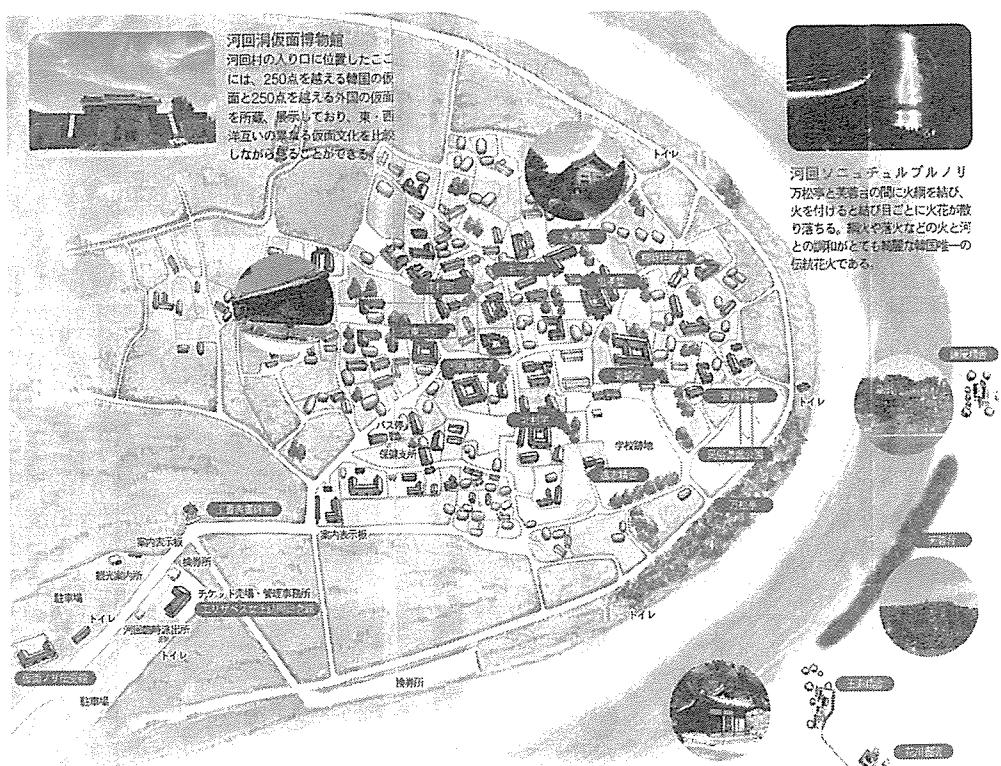
ソウルから東に車で約3時間のところにあるこの村は、豊山柳氏が600年余年間、代々暮らしてきた同姓村で、韓国南部の代表的な儒教、民族村を代表する村である。現在121世帯229名が住み、458棟（瓦葺き162、藁葺き211、その他85）の瓦と藁葺き屋根が特徴的な集落である。風水地理学的に、太極形、蓮花浮水形、行船形に該当する河回村は、洛東江（ナクトンガン）が緩やかにS字を描いて村を回っている。高麗時代の終わりごろ官職についた、柳從惠はじめ、大儒学者柳雲竜など多くの偉人を輩出してきた。村は丘を中心に川に向かって建物が配置されているため向きが一定でなく、韓国内の一般的な南方、東向きとは対照的である。また河回仮面が有名で仮面舞の伝統文化が残されている。



安東の河回村の全景（観光パンフより）



河回村の風景



安東の河回村の案内図（観光パンフより）

## 1. 新会員の紹介

2007年4月～6月の入会者は下記の通りです。(入会順、敬称略)

6月30日現在の会員数は、438名です。

正会員氏名	勤務先(フック)
大坪 明	武庫川女子大学(関西)
小林 清泰	(株)ケノス(関東)
高山 浩	福井商工会議所(北陸)
若本 和仁	大阪大学大学院工学研究科(関西)
坪倉 淳	キタイ設計(株)(関西)
山本 一馬	街角企画(株)(関西)
水谷 省三	(株)地域計画建築研究所(関西)
武山 良三	富山大学芸術文化学部(北陸)
加我 宏之	大阪府立大学大学院(関西)
三輪 康一	神戸大学大学院(関西)
木下 瑞夫	明星大学(関東)
長濱龍一郎	松下電工(株)(関東)
福田 知弘	大阪大学大学院工学研究科(関西)
大沢 昌玄	日本大学理工学部土木工学科(関東)

## 2. 退会者(2007年4～6月)

有賀隆、今井祝雄、岡辺重雄、岡部茂高、小川英明、春谷尚、蕪木伸一、國本桂史、後藤元一、澤一寛、篠崎弘晋、鈴木雄一、高波和由、田畠貞寿、富田勲、西村紀夫、松井英明、三原久徳、森延彦(敬称略)

## 3. 住所変更等(敬称略)

氏名	変更内容(新)
大矢 京子	(株)都市環境ランドスケープ 〒540-0034 大阪市中央区島町2-4-9 島町第二野村ビル6F Tel&FAXは変更なし
田村良二郎	尼崎市都市整備局 〒660-8501 尼崎市東七松町1-23-1 Tel. 06-6489-6144 FAX. 6489-6146 (有)間十間計画工房
辻 浩子	〒530-0035 大阪市北区同心2-13-26 Tel. 06-6355-2092 FAX. 6355-2093
森川 稔	滋賀県立大学人間文化学部 〒522-8533 彦根市八坂町2500 Tel. 0749-28-8451 FAX. 28-8626

## 広報委員会

白濱 力	石崎 均
土田 旭	伊藤 光造
近田 玲子	加茂みどり
菅 孝能	岸田 文夫
中嶋 猛夫	松山 茂
櫻井 淳	横山あおい
松村みち子	吉田 慎悟
島 博司	横山 裕
作山 康	